

環境学習 (2-C-9-1~2-C-10-2)

本セッションでは5件の発表が行われた。聴講者は80~100名と多く、環境教育・学習に関心の高さが伺えた。

9-2では、博物館での水循環を理解するための体験展示についての報告が行われた。ミストをくぐる導入から、地中を地下水となったつもりで地下水迷路を通りぬけ、人体の水分量の測定、最後にダイヤモンドダストを作って見るという24の体験展示をした。これらの体験をボランティアが支援するようにしたのも良い試みである。体験をした子どもへのアンケートで評価している。インタビューを用いた評価方法を取り入れるのもよいと思われる。

9-3では、下水道の雨水系末端に設置された雨水排水浄化施設について、集水域の住民を対象にアンケートとヒアリングを実施し、住民の理解度、協働への参加内容、環境保全意識などについて、環境教育の面からの分析を行った報告である。データ分析を行っているが、分析を行うものが施設自体どんなものか知った上で分析をした方が、さらによいと思われる。

9-4では、イベントの「夏休み多摩川教室」と「水フェスティバル」の概要およびその中で感じた「専門家と市民の情報・体験の共有」のあり方について論じている。イベントには多くの参加者が訪れ、各ブースを自由に回れる方式であるので、接触が短いという特徴がある。専門家自身も新たな学び、喜びを得ることができた。「相手にあわせて、楽しく、わかりやすく、前向きに」取り組んでいくことが大切であるとまとめられた。

10-1では「ため池」について活動した報告である。外来種問題に関する資料の掲示、質疑応答を行った。アンケートもとって解析した。また、地元の池の水利組合の会合に参加し、前記の活動内容について話しをした。総合学習的要素のことを小・中学生や地域住民と一緒に活動していこうとしている。このような活動をすることが発表者自身の環境学習になっているものと思われる。

10-2では、発表者が県職員として、中学校の活動を知り、地域に埋もれていた、三沢航空科学博物館の職員の方々、デジタル顕微鏡、プラズマテレビなどの有効な財産を積極的に活用し、同窓生のやぶなべ会とともに両者を結びつけた活動報告は非常に貴重で、示唆に富んだ内容であった。地域行政には、このようなコーディネーター能力がいっそう求められる。

(日本水環境学会水環境教育研究委員会 小寺 正明)